

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 一柳 廣孝

論 文 題 目

「無意識」という物語 近代日本と「心」の行方

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学	教授	中村 靖子
委員	名古屋大学	准教授	日比 嘉高
委員	都留文科大学	副学長	阿毛 久芳

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

〔本論文の概要〕

本研究は、19世紀から20世紀にかけて生じた、魂の属性としての「心」から脳内現象としての「心」へという意識観・心理観の変容を、日本近代に焦点を絞って明らかにしたものである。二部構成となっており、第一部では、「心」をめぐるパラダイムの変化が辿られ、第二部では芥川龍之介の作品群が、「無意識」の文学的表象の例として分析されている。

第一部第1章では、西洋の学問における科学的合理主義の導入にともない、従来の民俗的な靈魂観が迷信として排除された過程を、日本における心理学の成立を軸として論じている。第2章では、1900年代から1930年前後に至る催眠術書において、治療法の根拠として副意識・無意識・潜在意識が見いだされる過程を明らかにし、「無意識」の存在を日本にもたらしめたのが、アカデミズム経由の情報ではなく、1903年頃から顕在化する催眠術ブームだったことを指摘している。第3章では、千里眼事件をとりあげ、それが物理学アカデミズムの否定的見解の表明によって収束していった結果、「心」の神秘性が科学のレベルではほぼ完全に否定される過程を明らかにしている。第4章は、精神分析によって特権的な意味を付与された夢が、近代日本のアカデミズムにおいてどのように語られたかを論じている。第5章では、フロイト精神分析の日本での波及状況を、心理学アカデミズムの一般社会に向けた情報発信をも意図した最初の学術誌である「心理研究」を軸に分析している。

第二部では、夢と無意識を扱った芥川龍之介の作品群が分析されている。芥川は、大正期の先端的なフロイト受容とも関わって持続的に無意識の文学的表象に取り組んだ稀有な存在であり、その軌跡から、大正期における物語としての無意識の、代表的な様態を記述している。第6章では、没後の全集編纂の過程で生じた、フロイトに関わる改変をとりあげ、フロイトという名の読解コードとしての機能について検証している。第7章では、夢が組み込まれた作品群を分析し、前衛的な言語実験として導入されていた夢が、後には無意識を象徴するようになった過程が明らかにされている。第8章では、最晩年の作品において、夢と現実の境界が崩れ、夢が現実のリアリティを獲得していることが論じられている。第9章では、ドッペルゲンガーやデジャヴが描かれた作品群を分析し、夢を語る作品群と共鳴しつつ、自己忘却の恐怖や日常の分裂の様相が描かれていると指摘している。第10章では、「無意識」をめぐる芥川独自の軌跡が、時に心霊学を媒体としたメーテルリンクへの関心として表出したことを論じ、第11章では、日本古来からの民俗的な恐怖の表象や心霊学的世界観が取り込まれていたことを論じている。第12章では、そうした多方面にわたるアプローチが、芥川を探偵小説というジャンルに結びつけ、その構造のパロディ化が図られていることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

〔本論文の評価〕

本論文は、日本近代における西洋科学の受容を、「心」の領域において検証したものである。古代から連綿と継続してきた霊魂観の近代における再編の過程が多角的に検証され、その動的な展開が精緻に記述されている。

「意識」や「精神」という訳語の成立や、「無意識」という概念の受容を論じた第一部では、心理学を中心とした学術文献から、民間療法、近代の新興宗教、社会的な事件報道に至るまで、領域を特定せず幅広い調査が行われている。それらの綿密な調査のもとに、多領域にわたる言説が実証的に系統立てられ、「心」をめぐる知が科学と非科学の攻防の中で再編されていった過程がダイナミックに描き出されており、文化史的研究として大きな意義を持つものと評価された。西洋より輸入された科学的知見が土俗的・民俗的な文脈に結びつきながら展開していったという指摘や、フロイトの受容が多様な文脈でなされたという指摘など、日本近代の特質に関わる新見に満ちた考察といえる。明治初期を論じた第1章から、昭和初期を視野におさめた第5章まで、ほぼ半世紀にわたる流れが整理されており、劇的な転換期を俯瞰する枠組みを提示したものとして、高く評価された。

芥川龍之介の作品分析が重ねられた第二部は、従来の芥川研究では見過ごされてきた作品が抽出され、新しい角度からの読み直しとなっている。作品論やテキスト論、カルチュラル・スタディーズ、あるいは作家自身について精神分析学の見地から検証を加えるパトグラフィーなど、従来の立場のいずれにも包含されない研究として独自性の高さが評価された。とくに第12章における、現実と幻想や夢との関係の転倒についての指摘は、探偵小説というジャンルの特性に関わる問題として審査員の関心を集めた。

本書を大きく分ければ、第一部が文化史研究、第二部が文学研究となっており、双方の研究分野にまたがる視野の広い研究といえる。ただし、第二部の芥川龍之介の作品群にみられる特徴が、第一部で描き出された「心」をめぐる知の流れの中で、どのように位置付けられ得るのかという点については具体的な記述がなされていないため、質疑応答の中で補足説明を得た。また、第一部に関しては、西洋医学への東洋医学の導入との関係や、クラフト=エビングやユングなどフロイト以外の理論の受容状況、第二部に関しては、「夢」や「ドッペルゲンガー」などの主題を扱った他の作家の作品との共通性や差異、芥川龍之介という作家表象が同時代の「無意識」理解に与えた影響などについて質疑応答がなされ、本論文の考察によって拓かれ得る問題系について、多くの可能性が認められた。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。